

らの帰りは肩が凝ったような感じになつてしまいました。

大前提で考えると病院は病気を治すところ。もちろん治療最優先ですが、もっと患者さんが元気になる空気にできないかなあと考えてみました。

大病院ですから重症の方から退院間近な方までいます。今の病院は診療科ごとに病棟が決められています。が、重症度別に階を変えていく作戦。手術直後などは静かで静寂なフロアで、どんどん良くなるにつれて階が変わっていき、退院間近の方がいる階はとっても賑やかでワイワイしてアトラクション的なものまである。それこそ緑も豊富にあったり。病室を出ていききたい空気があふれているというのは。

病院の雰囲気が変わるといいなあ

と思いましたが：一番は入院しないことですね。

永遠の課題、知覚過敏

ごとう通信でも何度か取り上げている知覚過敏。冬場は特に水も冷たいので訴える方が多くいます。僕が学生時代に言われていたのは「むし歯の兆候」だけです。どこかに小さなむし歯があるかもしれないからよく観察するように教えられました。大学を卒業する時期になると、歯の表面に何らかの異常が生じてしてみると言われ、知覚過敏の塗り薬が出てきました。もちろん歯の中の神経がしみると思われていました。

しかし、歯の神経を抜いているのにしみると訴える方もいます。かつ

ての歯医者は、：もしかして今もいるかも：「歯の神経を抜いているからしみる訳がない！」と言っていました。実は、歯の中の神経だけでなく、根の周りの神経も知覚過敏を起こすというのがわかったのはそんなに昔のことではありません。しかも、噛み合わせや歯ぎしりも関与しているというのは、歯医者全員が知っているわけでもありません。

知覚過敏はつらいのですが、痛みと違って原因の特定がとても難しいのです。もしかして、今の歯科界が知らない何か別の原因があつて、それが特定できると知覚過敏の人が一発で治るということが起こるかもしれません。ただ、知覚過敏をすごく研究している人はいません。毎日の診療の中で何かを見つけていかなければならないなあと思います。